えどがわの女性
vol.34
2018年
1月

「平明にして奥深く」
－短歌に出会って－

中島 央子（なかじま えいこ）
1929年（昭和4年）
静岡県富士郡岩松村（現富士市）生まれ
南小岩在住

短歌を詠む

短歌はねえ、こんなに長くなるとは思わなかったのですよ。40年ぐらいになりますね。いつのまにか。ちっとも進歩しないまんま。江戸川区の短歌連盟ができて、65年、関わって20年、委員長になって5年です。短歌連盟で初心者講座をやって、サークルを作って、今5つあります。講師を引き受けて15年です。教える立場になると相当勉強しないと。指導して、歌を直すという仕事もあります。日々何とか保っていけるのは短歌のおかげかなと思いますよ。短歌に出会ってなかったら今ごろぼけているかもしれない。

夫が亡くなって10年ぐらい経ったころでした。娘たちも卒業、就職して一区切り。江戸川区の広報で短歌の講座があるのを見つけて、グリーンパレスなら近いと思って申し込んだのです。女学校の時も嫌いではなかったけれど、そんなに深く短歌の世界を知っていた訳じゃなかった。入ったのはいいけど、こんなはずじゃなかったっていうことばかりだったのですけれどもね。「いい感性をお持ちですね」なんてほめられて。講師が「地中海」という短歌結社の偉い人だったのですよ。それで誘われて「ああそうですか」と、ほいほい入ったのが運の尽きだったのです。厳しかったですよ。もう怖い先生で、ほんとに叱られ通しでね。「あなたいつまでこんな歌作っているの」と。自分ながら、よくやめなかったなと思います。

短歌を始めてから、こういう日本語があるんだって、言葉の多さにね、すごく驚きましたね。同じ意味でもいろんな言い方がありますでしょう。ひとつ歌を作るにしても同じ表現でもいろんな言葉があるから、どれが適切な表現かっていうのも、いろいろ探したりしながら。同じ題を出されてもみんな違う歌が出てきますでしょ。それが面白いなと思いますね。

どのサークルも仲間がみんなね、よくて。それで作るばっかりじゃなくて1年に1回か2回は旅行に行ったりして。「地中海」では1泊2日。行った日の夜、20首作るのです。新しい土地へ行って、見て、聞いて、パッパッパと20首。みなさん、できあがるものなのですね。あのね、最初はね「どうしよう」と思いましたね。みんな「できない、できない」って言いながらね、朝発表してお昼まで勉強会。

空襲の日々

生まれたのは母の実家、静岡県富士市です。「央子（えいこ）」というのは父が名付けたのですよ。誰にも「えいこ」と読んでもらえないのです。父が国語漢文の教師だったものですから。「央」は「中庸、右にも左にも偏らず」という意味もあって。それから中央線の吉祥寺に住んでいましたからね。弟が2人います。母は「教育ママ」でね、怖かったですよ。小学校行っているころはね。もうその日に習ったことをね、国語、そのころは「ヨミカタ」って言いましたかね、そこをもう何回も何回も読まされてね、それで全部書かされるのですよ。

女学校に入ったころは戦争が始まっていました。体育の時間は畑仕事をさせられて、校庭でジャガイモを作って。3年の時、勤労動員で立川の工場に吉祥寺から通っていました。飛行機の部品を作っていました。ジェラルミン磨いたり、型を抜いたり。たびたび空襲があって、親が心配して、わたしだけ先に母の実家へ昭和20年に疎開させられたのです。富士宮の女学校に転校して、そこでも印刷工場へ勤労動員に。同年代の仲間ともよく言うのですけど「こんなに長生きするとは思わなかったわ」と。戦争中なんて毎晩毎晩空襲があって、昼間の服のまま着替えないで寝ていました。あした生きていられるかどうかわからない日々だったから。

女学校時代なんて本は読んでないのですよ。工場でハンマー振り回していましたから。子どものころで鮮明に覚えているのはキンダーブックかしら、大きな絵本でね。小学校高学年になってから読んだのは佐藤紅緑（こうろく）の小説とか。マンガはあまりなくて『のらくろ』が全盛だったからよく読んでいました。それと父の本でね『明治・大正・昭和文学全集』というのがあって、昔の本のいいところは読めない漢字にルビがついていたことでしたね。万葉集とか新古今和歌集とか、それから平家物語とかいっぱいあったのです。教科書に平家

江戸川区聞き書き研究会

聞き書き研究会とは、江戸川区で生活し、江戸川区を愛し、強く逞しく生きた女性の姿を江戸川区女性センターの区民ボランティアが「聞き手」となって編集し、文書として残すための活動です。

物語なんか出てくると授業で訳すでしょ。それは得意だったのですよ。そういう言葉に慣れていた。古文が好きだったのですね。東京の大学は無理ですよ。弟がいましたからね。静岡の製紙会社に勤めました。

夫の死

人生最大の転機は夫が亡くなった時でしょうね。どうやって食べて行こうかと思いましたもの。ぼうぜんとする暇もなかったというか、上の子が中学3年で高校受験を控えていたものですから、あしたからでも働かなければと。当時はみな結婚するものだと思っていたんですよね。見合いでね。嫌っていうほどのこともなかったし、大学出て保険会社に勤めていて断る理由がなかったの。長女が昭和26年生まれ、次女が29年です。わたしが2人目を産んで、肋膜をやって、結核をやって、ずうっと寝ていたでしょ。わたしのほうが後に残るなんて思ったこともなかったのですよ。昭和41年、お休みの日で、後楽園へ野球を観に行ったのですよ。あの都市対抗を真夏の暑い日に。そこで倒れちゃったのですね。

◆歌集（右から桃李、柑橘木立、ベドウィンブルー）

近所の方が「中島さん、これからどうするんだい」「西葛西にある下請けで人を探しているから行ってみるかい」と。車の部品工場です。実は、夫の親せきから援助の申し出がありましたが、受けませんでした。今はもう会社はないのですけど、そこで30年ぐらい働きました。区役所前でバスを乗り継いで西葛西まで通いましたね。渋滞でバスが動かなくなると船堀から歩きましたよ。仕事は給与計算。東西線の西葛西駅ができあがってゆくのを会社の窓越しに見ていました。給料は信じられないぐらい少額で、女性社員にはボーナスが出ませんでしたね。

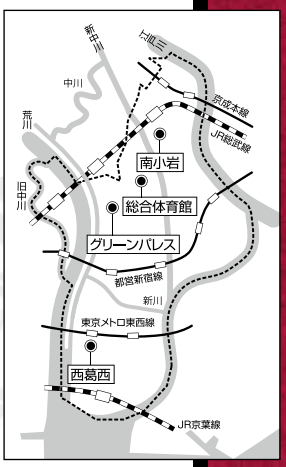
高度成長期に会社は大きくなり、わたし1人だった女性社員も3、4人に増えました。社員旅行もずいぶん行きましたね。いちばん思い出に残っているのは花巻の新工場見学かしら、宮澤賢治の花巻です。松島辺りからずうっと回りました。当時詠んだ嫌煙の歌が朝日新聞の天声人語で紹介されました。「嫌煙の鬼にもなれずオフィスの窓少しあけ煙逃しむ」

勤めている時にバトミントンか何かして、相手が男の人たちばかりでしょ、膝を痛めたのですよ。それで会社終わってから西葛西のスポーツセンターのプールで歩いたりしていました。うちのほうには総合体育館にプールがあるんですね、初心者教室のサークルに入り、基本から教わりました。コーチが「はい次、はい次」と、どんどん泳がされるでしょ。あそこまで泳がなくちゃ、そればっかり、なんにも考えないですよ。泳いだあとはからだが軽くなるのよね。それがいちばん魅力でしたね。わたしはバタフライがいちばん好きです。くたびれますけれどね。人間って基本を教わるとできるようになるものだと思いました。つくづくと。「ひとりなるわが界青し事務服を脱ぎ来て泳ぐ夜のプールに」

歌集

夫が亡くなって、半年間ぐらいですかね。父が毎朝電話してきたのですよ、「元気か」ってね。「大丈夫、大丈夫」って。第一歌集『桃李（とうり）』を昭和63年に出版しました。85歳を迎えた父への贈り物です。父が題字を書いてくれました。小岩でともに暮らした夫の妹が病死しました。生涯独身で世界中を歩いた人でした。そのころの歌が「いもうとの形見となりし紅ふかきヴェネッィアグラス両手に囲む」です。平成8年に第二歌集『柑橘木立（かんきつこだち）』を刊行しました。会社を定年退職、嘱託として会社に残り、父母の介護のため退職。父の死に遭いました。平成22年に第三歌集『ベドウィン・ブルー』を。一人暮らしの母を看取りました。友だちに恵まれ、娘に恵まれ、海外によく出かけました。アフリカに行った時の歌で江戸川区の文化祭で賞をいただきました。「落日を見むと漕ぎ出すザンベジの河面に無数の河馬（かば）の目光る」

だいたい10年に1冊です。1冊に400首、1000首を400前後でまとめるのですよ。第四歌集も考えないではないですよ。まとめるかと思うけどなかなか手を付けられませんね。追われる人生ですよ。でも、やめようと思ったことはないですよ。そして、できた時の喜びですかね。旅行に行った時でも、あんまり美しい景色っていうのは歌にならないのですけどね。なんかちょっと感じたことがあったらそこを歌うとかね。それか日常生活でもなんでもないことでも歌っておけば。普通の生活をしていると、どんどん忘れていきますよね。こう歌集にした時に、「ああ、あんなこともあった、こんなこともあった」なんていうのがね、思い出されたりして、その時の喜びですかね。「五十年住み来し小岩古文書に記されてある甲和里（こうわりさと）の郷」



◆ インタビュー／2017年2月
2017年3月
◆ 聞き手／村田正子　小池智恵子
◆ コーディネーター／樋口政則

◆お問い合わせ◆
江戸川区女性センター
☎5676-2455(代)